

Prajñākaragupta の Cārvāka 派批判

林 慶仁

1.はじめに

おおよそのインドで発生した宗教と哲学の根底には、輪廻の思想がある。ここから逃れる方法を求めて宗教が発生し、様々な形態の思想が展開したことは論をまたない。則ち輪廻を逃れる方法や、解脱の定義がその宗教・宗派の特徴として一たとえ最終的な真理は語られるものではないとしても一語られるとして過言ではない。則ち唯一の真理を詩人達が多様に語るとすれば、その多様性こそが宗教に他ならない。それに対して輪廻・生死のあり方を捉える方法、輪廻に対する態度を知ること、また別の意味でその宗教の価値を決定する基準ともなり得る。もっとも解脱は多く語られても、輪廻に対しては周知のこととして話題とされること自体が少ない。当然のことを説明する場合に、人は最も分かりやすい言葉で、最も簡潔に語る。あたかも、大学者による一般人に対する講演のように。それと同時に、宗教家は、個人的な体験に裏打ちされた解脱を語る場合よりも、むしろ輪廻を語る場合には—その個人体験が深ければ深いほど—最も本心を語るであろう。あたかもまさに死のうとする人間の語る言葉が真実であるように。以上のことから、一部の輪廻を認めない例外を除いて、輪廻を認める宗教家の述べる輪廻観への興味は尽きない。そこには自らの属する宗派・学統に縛られる姿もあり、過去の論書を引用して解釈し直そうという姿もあり、先師達のギリギリまで言わなかった言葉を、つい個人的な信仰から口に出してしまう姿もある。完成した論書があるとすればそのどこに興味が生じようか。

インドにおいて輪廻を認めない学派をチャールヴァーカ派 (Cārvāka, 別号ローカーヤタ派 Lokāyata, バールハスパティア派 Bārhaspatya ともいう) という。彼らは物質の存在しか認めず、前世はなく、死後もないと主張する。このチャールヴァーカ派に対して仏教論理学の大成者ダルマキールティ (Dharmakīrti, 600-660) は、凡夫にとって輪廻はまさしくあると反論する。則ちそれはダルマキールティによる輪廻の論証に等しい。その論は特に彼の宗教的な分野を広説するプラマーナヴァールツィカ (PV) のプラマーナシッディ章 (Pramāṇasiddhi-chapter, PV

II) において見られる。その影響は諸の註釈者のみに留まらず、直接・間接かは別にしてダルモッタラ (Dharmottara) のパラローカシッディ (PLS)、シャータラクシタ (Śāntarakṣita) 及びカマラシーラ (Kamalaśīla) の タットヴァサングラハ (TS) とパンジカー (TSP) にまで影響する。しかしながらブラマーナヴァールッティカへの註釈の中においても、単に註釈に留まらず、ダルマキールティの思想を発展させる場合もある。特にブラジュニャーカラグプタによる註釈は大部であり、サンスクリット本もあるし、思想的に看過できない要素を含んでいる。今回扱うのは、彼によるブラマーナヴァールッティカバーシャ (PVBh) p.53,27-p.57,14 であり、彼の PV II に対する註釈の中でも特に重要な部分の一つとして挙げる事ができる箇所である。それは何故か。ここではブラジュニャーカラグプタが輪廻に直接対峙し、自分の宗教観を述べている箇所でもあるからである。更に彼の思想の中で重要な未来原因説 (Bhāvīkāraṇavāda) や夢中身体説 (Svapnāntikaśariravāda) にも関連する箇所でもあるからである。彼のこの箇所から知られる宗教観という点については拙稿 (「輪廻無始無終議論の展開—Prajñākaragupta の立場—」『日本印度学仏教学会』第四十七卷 (予定)) を参照されたい。またブラジュニャーカラグプタによる未来原因説について、最初に視点を提示したのは小野氏 ([小野]) であったが、この箇所に関連する箇所については護山氏の論文 ([護山]) を参照されたい。また夢中身体説についてはジャイナ教研究会誌に寄稿予定 (但し査読を通過すれば) なので、そちらを参照されたい。

もう [Franco] に対して不足を言うのはやめよう。[今回扱った箇所は [Franco] pp.162-179 に英訳あり。また [Franco] p.95-132 では論文による考察を行っている。] いくら有益な二つの復注を全く参照しないとしても、訳があるのとないのでは全然違う、次に読む者が楽である、世界で初訳というだけで充分価値がある、とこちらの側で発想を転換しさえすればいいのだ。実際先号で発表した箇所は (PVBh p.71,12-74,4) 驚く程 Yamāri の解釈とは逸脱していなかった (無論 Yamāri の解釈がすべて正しいとは決して思わない。しかしながら意味不明の箇所を何度彼に助けてもらい、更に将来も助けてもらうことだろう。自分よりも深くブラジュニャーカラグプタの文章を読んでいる者がいるにも拘わらず、それを無視するというのは、翻訳者が註釈を作っているというのと等しい。Franco の本を PVBh Franco 注と呼ぶ所以である)。勿論彼の読解力によるものであろうけれども、それ以上に Tibet 語訳者のロデンシェーラブ (blo ldan shes rab, 1059-1109)

の存在が大きいであろう。彼は PV, PVin のみならず、PVBh とそれへの復注 (Ya) をも Tibet 語訳している。よって PVBh の文章を翻訳する場合、彼の Tibet 語訳は最も有益である（実際、この道の大先輩は、PVBh を Tibet 語から訳すことが多いのだと述べられたのを聞いている）。しかしながら、今号の箇所に関する限り、疑問を抱かせる箇所が少なくない。Tibet語訳から翻訳する限り、「当たらずとも遠からず」という位までにはなるが、意味のあいまいな翻訳と言わざるを得ない箇所もあるし、明かに Sanskrit の意味の取り違えで破綻している箇所もある。復注を参照されなかったのが残念でならない。しかしながら、無論彼の本の随所に見られる欧米人特有の言語感覚や、広範な文献に眼を通したことによって得られるパラレルな文章の発見などは、到底筆者の及ぶ所ではない。

なお、本論文に関して東京学芸大学の稲見正浩氏、東京大学大学院の護山慎也氏より貴重なご意見をいただきましたことを、ここに記し感謝申し上げます。

2. 概要

では今回試訳する PVBh (p.53,27-p.57,14) の箇所の特に特徴的な箇所を見ていこう。

チャールヴァーカ派は、大種の転変によって生命が誕生するのであり、この世に生まれた者の心は大種に依存した身体を自性としており、母父の身体より生まれた結果であり、固有の性質を有しているものである。前世があつて出生するでもないし、来世で再度生を受けることもない、としている。それに対して仏教徒プラジュニャーカラグプタは、呼気等は、修習によって生じる特別な自性を持っているし、その修習も父母によるものではなく、自己の修習に基づくものである。生を持つ者は、自己の相続によって成立しているものである。

もし修習なくして生を受けることが容認されるならば、あらゆる因果関係が滅してしまうという矛盾になるし、前世から来るのではなく、大種によって生じるならば、あらゆるものが命を持つという矛盾にもなる。

次に修習によって生じるという仏説を批判するために、因果論批判がなされる。仏教徒は同種の修習によってこの世に生じることがあるとするが、チャールヴァーカ派は因果であれば、必ず因と果とで別種であるとする。それに対してプラジュニャーカラグプタは、煙は煙から生じることがある。また新生児は前世と

同類因というわけではないが、修習によって前世と同じである、とする。

前世の論証に対して、次に来世の論証がなされる。この議論は十全な原因によって結果を生じ得るといふ、いわゆる未来原因説の輪廻への応用とも言うべき重要な箇所である。この偈そのものは、生井博士の論究がある（〔生井〕 p.515-530）。プラジュニャーカラグプタのこの偈そのものへの注は少なく、この議論自体は、k.49 に対する註釈で詳論される（〔護山〕参照）。ここではむしろ輪廻のための完全因としての業と煩惱が議論される。そして他の身体への移行が起こる譬喩として夢の中の身体への移行が出される。これはプラジュニャーカラグプタを夢中身体論者とするための重要な記述を含んでいる。

この箇所はプラジュニャーカラグプタが力を入れて記述した箇所と思われ、随所に彼の本心を伺う箇所が散乱している。特に彼自身の口から唯識説として出される箇所は重要であると思われるし、勝義・世俗の二諦からの唯識の分類などは特筆に値する。最終的には、プラジュニャーカラグプタの考えていた唯識説での勝義とは、概念と対立概念との非区別を示しており、輪廻の論証においては、解脱した者と輪廻のある者との非区別として示される。それに付随して真実と非真実の区別が世俗に過ぎないことや、プラマーナ論と空性との関連への言及など興味は尽きない（印仏研拙稿参照）。それは先に述べた如く、輪廻に対峙したプラジュニャーカラグプタが本当の姿をさらしたものとさえ言えよう。

3. 科段

大まかな段落分け

- | | | |
|-----|--------------|------------------|
| 1. | p.53,27-54,8 | チャールヴァーカによる出生説 |
| 2. | p.54,9-19 | 大種と真理について |
| 3. | | PV 36,37a の解釈 |
| 3.1 | p.54,21-31 | 生は自己の相続として生じる |
| 3.2 | p.55,1-24 | 生は自己と同種なものとして生じる |
| 3.3 | p.55,25-56,2 | 転変説は不成立 |
| 4. | | PV 37bcd の解釈 |
| 4.1 | p.56,7-15 | 生の無始・無終性 |
| 4.2 | p.56,15-57,5 | 別の身体へ結生する原因 |
| 4.3 | p.57,6-14 | 唯識説と転生説の関連 |

細かな段落分け

- | | | |
|-------|--------------|---|
| 1.1 | p.53,27-28 | 敵者説「心は母父の身体の結果であり、身体の自性を持つ |
| 1.1.1 | p.53,28-30 | 絵の譬喩（自性と結果の説明） |
| 1.1.2 | p.53,30-31 | アームラ樹の譬喩（自性の説明） |
| 1.1.3 | p.53,31 | 煙の譬喩（結果の説明） |
| 1.2 | p.53,31-54,2 | 心は性質を有す、自性に基づく、酒の譬喩 |
| 1.3 | p.54,2-6 | 四大のみが真理、唯識も空性もない |
| 1.4 | p.54,6-7 | 心は身体・感官・対象より生じる |
| 1.4.1 | p.54,7-8 | 前世から結生することはない |
| 2.1 | p.54,9-17 | 大は五種のみ |
| 2.2 | p.54,18-19 | 空性と量について |
| 3.1 | p.54,21-23 | チャールヴァーカ「身体は父母に依存して、前世から来たものではない」 |
| | p.54,24-27 | [答論] <PV 36,37a>生誕の場合、心等は身体のみから生じるのではない |
| 3.1.1 | p.54,28 | [理由1] 呼気等は特別な自性を持っている |

- 3.1.2 p.54,28-30 [理由2] 呼気等は自己への修習に伴伴する
- 3.1.3 p.54,30-31 「父母の身体も原因である」ことも不合理
- 3.2 p.55,1-2 前世の修習がない場合の矛盾<atiprasaṅga の1つ目の解釈>
- 3.2.1 p.55,2-6 因果関係は必ず保持される、同種の修習から生じる
- 3.2.2 p.55,7-11 [反論1] 「因果は別種である」
[反論2] 「因果であれば別種となる」
- 3.2.2.1 p.55,12-14 [答論1] 煙は同種因より生じる
- 3.2.2.2 p.55,15-16 [答論2] 幼児は同類因によるのではないが、
修習によって前世と同種である
- 3.2.2.3 p.55,16-20 [答論2] を論証式化する
- 3.2.3 p.55,20-24 [チャールヴァーカ説]
- 3.3 p.55,25-26 大種生に対する批判<atiprasaṅga の2つ目の解釈>
- 3.3.1 p.55,26-27 [反論] 「大種の転変差別により特別な生が生じる」
[答論] それは経験されない
- 3.3.2 p.55,28-29 [反論] 「転変の前後で心の相違が経験されない」
- 3.3.2.1 p.55,29-32 転変によって相違は経験されない
- 3.3.2.2 p.55,32-56,1 修習のみが結果として経験される
- 3.3.3 p.56,1-2 [帰結] 生類は同種の生存に基づく
4. p.56,3-6 諸因が成立しないならば来世はない
現世にあるものは来世でも結生する<37bcd>
- 4.1. p.56,7-9 [反論] 「前後の生は分断している。無始でも無終でもない」
- 4.1.1 p.56,9-15 有の無始性は修習（自性ではない）によって説明される
覚醒時が夢中の修習からあることが譬喩とされる
- 4.2 p.56,15-16 [反論] 「感官がどうして別の身体へ結生するのか」
- 4.2.1 p.56,17-18 別の身体にある能力が業の力より別の身体に移行する。
夢の身体のように
- 4.2.2 p.56,19-20 [反論] 「夢中の身体は非真実である」
[答論] 真実・非真実は世俗に過ぎない
- 4.2.3 p.56,21-23 [帰結] 因（業と煩惱）によって結生することが生じ

		る
4.2.4	p.56,24-26	能力のある原因は必然的に結果を生じること
4.2.5	p.56,27-57,1	「肯定的随伴 (anvaya) , 否定的随伴 (vyatireka) による反論」と、それへの答論
4.2.5.1	p.57,1-5	「肯定・否定的遍充は直接経験されない」不二の経験のみ
4.3	p.57,6-7	[唯識説]
4.3.1	p.57,7-9	因果関係は世俗である、来世も考察されるべき必要性
4.3.2	p.57,9-10	迷妄が利益と最高の人間性を滅する
4.3.3	p.57,10-12	諸の相違は無始の修習による <唯識説>
4.3.4	p.57,12-14	[帰結] 習気は感官や外部対象とは関係なく無始であり、迷妄のある限り無終である

Abbreviations

TSP	<i>Tattvasaṃgrahaṇīkā</i> of Kamalaśīla, ed. by S D Shastri, Vol.2, Varanasi, 1982.
PLS	<i>Paralokasiddhi</i> of Dharmottara, E. STEINKELLNER, DHARMOTTARAS PARALOKASIDDHI, wien, 1986.
PV	<i>Pramāṇavārttika</i> of Dharmakīrti
PVṬ(Ra)	<i>Pramāṇavārttikaṭīkā</i> of Ravigupta, P 5722.
PVBh	<i>Pramāṇavārttikabhāṣya</i> or <i>Vārttikālaṅkāraḥ</i> of Prajñākaragupta (being a commentary on Dharmakīrti's <i>Pramāṇavārttikam</i>), ed. by Rāhula Sāṅkrtyāyana, Patna, 1953.
PVV	<i>Pramāṇavārttikavṛtti</i> of Manorathanandin, ed by S. D. Shastri, Varanasi, 1984.
MAV	<i>Madhyāntavibhāga</i> of Maitreya.
Viṃś	<i>Ācāryavasubandhupraṇītaṃ Vijñaptimātratāsiddhi-viṃśatikākārikāḥ savṛttikāḥ</i> , ed. by S. Lévi, Imprimerie Nationale, 1925.
ViṃśṬ	<i>Prakaraṇaviṃśatikāṭīkā</i> of Vinītadeva, p 5566.

- HBṬ *Hetubinduṭīkā* of Arcaṭa, ed by Sukhlalji Sanghavi and Shri Jinavijayaji, Baroda, 1949.
- (Ja) *Pramāṇavārrtikālamkāraṭīkā* of Jayanta, P 5720.
- (Ya) *Pramāṇavārrtikālamkāraṭīkāsupariśuddhināma* of Yamāri P 5723.
- [Franco] Eli Franco, *Dharmakīrti on Compassion and Rebirth*, Wien, 1997.
- [稲見2] 稲見正浩「『プラマーナヴァールツティカ』プラマーナシッディ章の研究(2)」『広島大学文学部紀要』52、1992.
- [稲見6] 同上「同(6)」『東京学芸大学紀要 第二部門 人文科学』48、1997.
- [小野] 小野基「プラジュニャーカラグプタによるダルマキールティのプラマーナの定義の解釈—プラジュニャーカラグプタの真理論—」『印度哲学佛教学研究』42-2、1994.
- [生井] 生井智紹『輪廻の論証』東方出版、1996.
- [護山] 護山慎也「来世の論証にみる Prajñākaguṭpa の未来原因説」『インド哲学佛教学研究』5、1998.

*なお和訳文中<>は *pratīka* を示す。則ち PVBh 中は PV に対する、(Ja) や (Ya) では PVBh 及び PV に対する *pratīka* を示している。

4.和訳

1.1 p.53,27-28 敵者説「心は母父の身体の結果であり、身体の自性を 持つ

[チャールヴァーカ説=この世に生まれた者の心は大種に依存した身体を自性と
し、母父の身体の結果であり、性質を有しているものである¹。]

もし「[この世に生まれる者は、] 母父の身体に依存することを経験すること
から、[この世に生まれる者の] 心は[母父の] 身体に依存し、[母父の] 身体
の結果であることが知覚される。則ち生じられるべき身体の大種に依存し、そ
の[身体]の自性を規則 (ācāra) とした鋭い心等を持つ者は、母父[の身体]に肯
定の随伴する。

1.1.1 p.53,28-30 絵の譬喩 (自性と結果の説明²) (敵者説の続き)

例えば絵のように³。絵の作者の色・識等 (五蘊) に随伴し、壁 (この世の身
体⁴) に依存した絵は⁵、絵の作者 (母父⁶) の結果を本性としている。それによ
つて、絵は、壁の無によらない [、必ず壁が必要である]。他の壁 (別の身体とい
う事物) に移行もしないし、別の壁から来ることもない。

1.1.2 p.53,30-31 アームラ樹の譬喩 (自性の説明⁷) (敵者説の続き)

¹ 以下説明されるチャールヴァーカ説をまとめておく。

² (Ya) 55a7 以下、rang bzhin を自性 (*svabhāva)、'brasu bu を結果 (*kārya) とした。チャールヴァーカに言及される徳 (guṇa) には yon tan の訳語が与えら
れる (Tib. 55a6) ので混同はしていない。

³ taccitra- を Tib. より citra- と読む。

⁴ (Ya) 55a6-7

⁵ -āśritās を Tib. より -āśritacitaras と読む。

⁶ (Ya) 55a7

⁷ (Ya) 56a2-3

あるいはアームラ (āmra) の果実等の成熟によって生じた色 (赤) のように [努力によらずに、自ら生じることもある⁸⁾]⁹⁾。

1.1.3 p.53,31 煙の譬喩 (結果の説明¹⁰⁾ (敵者説の続き)

[この世に生まれるという] 結果も [母父の身体から生じたのであるのが正しい。だから]、煙は [原因である火より] 別の火より来たものでもないし、別の火へ行くのでもない¹¹⁾。

1.2 p.53,31-54,2 心は性質を有し、自性に基づく、酒の譬喩 (敵者説の続き)

一方酒に¹²⁾依存した酔いの力 (酒の性質¹³⁾ (i.e.心) は、渋味等と結合したものの (酒) (i.e.感官) より、以前にある [他の力 (*śakti) より生じる¹⁴⁾] のではない。滅しつつあるもの (酔い) (i.e.心) は別の酒 (i.e.感官) に依存し [てあるものより来ることも¹⁵⁾] ない。その様に感官 (自性) と心 (性質) との相違 [も¹⁶⁾] ある¹⁷⁾。

1.3 p.54,2-6 四大のみが真理、唯識も空性もない (敵者説の続き)

⁸⁾ (Ya) 55a8

⁹⁾ [Franco] p.163,3-4 で「果実なしではなく、他の果実に移行せず、別の果実から来ない」と説明を加えている。

¹⁰⁾ (Ya) 56a3

¹¹⁾ text 脚注の note 2 を採用する。

¹²⁾ (Ya) 55b1 は「第三説」とする。これは恐らく結果の説明である煙の譬喩を除いたものであろう。

¹³⁾ (Ya) 55b2

¹⁴⁾ (Ja) 222b5

¹⁵⁾ (Ya) 55b2

¹⁶⁾ Tib. のみ。

次のよう [ブリハस्पティ (*Bṛhaspati) によって¹⁸] 言われている。『地・水・火・風が真実在 (tattva) である。地等だけが真実在であり、真実在は地等に他ならない¹⁹。虚空等はない。刹那性等もない。そのように [四大という] 真実在だけ [があり]、唯識はない。一切 [法²⁰] が空であることもない。[唯識や一切法空など] すべての場合量 (認識根拠) がないから。』そ [の四大²¹] の集合に対して、対象・感官・身体²² という命名がある。量ることのできない、大種の特殊な転変 (転変差別) の²³ 集合が、身体等²⁴ と言説された対象である。

1.4 p.54,6-7 心性は身体・感官・対象より生じる (敵者説の続き)

その身体・感官・対象から心性 (caitanya) がある²⁵。例えば [酒の薬である²⁶

¹⁷ この辺を Yamāri は自性 (*svabhāva) と性質 (*dharma) との関係に言及している。(Ya) 55b3-4 「[敵者が] 「ここで自性と性質の説に相違がどうしてあろう」と言うならば、真理においては如何なるもの (相違) もないが、しかしながら言説のみによって作られている。相違した言説は、相違するものを決知することによってある。[しかし] 無相違を決知することによって自性がある。〈煙の自性〉とは、相違すると語ることを認めていても、無相違を決知しているのである。」またここで Yamāri は kārya, svabhāva, dharma という点よりの例示として出しているが、本来 Bārhaspatya は kārya と dharma としての二つ、śakti, guṇa という点からの喩例の提示が可能であるとしている ([生井] p.38-40)。ただし śakti にも言及し、(Ya) 55b5 「[自性より] 相違した śakti の説によつては、相違しないと説しているのである。」とする。

¹⁸ (Ya) 55b7

¹⁹ Tib. は両文を同じように訳している。

²⁰ (Ya) 55b8

²¹ (Ya) 56a1

²² Tib. は語順が異なる。

²³ (saṃbhūta) は取る。

²⁴ śarādi- を Tib. より śarīrādi- と読む。

²⁵ Cf. [生井] p.30 の脚注に言及がある。

²⁶ (Ya) 56a2

] 酵母 [や水²⁷] 等から酔いの力があるように。それ故に [心性に基づいた] 認識は酔いの力のようなものである。

1.4.1 p.54,7-8 前世から結生することはない (敵者説の続き)

[心性は身体・感官・対象から生じるので] 前世から来たものとして結生することはない。[酵母等のみからの] 酔いの力のように、と例示されている。例えば絵 [が他の壁から来たのではない] ように、また煙 [が他の火から来たのではない] ように²⁸。実にこれらで [他所からここへあるいはここから他所へ²⁹] 移行するもの達は経験されない。] [と言うならば]

2.1 p.54,9-17 大は五種のみ

それは違う。

色等を離れて、[大]種の知覚がどこにあらう。それら(大)は³⁰、五つであり、それより[別の]数の制限は合理ではない。<379>色・声・香・味³¹・触が五つの大種である。それらの集合に対して地等と命名する。地等は[色等より]別様に知覚されることはないから。

「しかし味は触 [に分類されるの] であるから、[大種の特別な] 転変は四つである³²。」 [と言うならば] そうであっても、地等というのは合理ではない。色等という言葉 (abhidheya) があるべきだろう。[それら五大が] 刹那等であるという所証は、後に語るであらう。以上のことから、それ(汝の説)への反論はしない。更に、

このように [汝のいう四大で分類するならば] あれこれと経験され

²⁶ (Ya) 56a2

²⁷ (Ya) 56a2

²⁸ この付近は [生井] p.39-40 に和訳がある。

²⁹ (Ya) 56a3-4

³⁰ Tib. は yang とする。

³¹ [Franco] p.164, n.13 では、味と言葉との入れ替えが指摘してある。

³² -parimāṇatā → -pariāṇamatā と text の note 3 に従う。

る（感受される³³）一切が、[単に経験のみに基づくので]単一であるという矛盾となる。一方、[対象のみに依存して]種類を区別するならば、[区別は]無窮という矛盾となろう。〈380〉

それ故に五つの所依[則ち五根³⁴]に依存した所取は、五種と示されるべきである。一方その内なる区別（眼耳鼻舌身という感官知）は、[対象の]五性を否定しない。〈381〉

2.2 p.54,18-19 空性と量について

およそ「一切が空性に対して、量があると言うならば、[空性を成立させる量があるので³⁵一切が]空性ではない。[量が、能証と所証のない一切が³⁶]空性と言うなら[一切法を空性として成立させる³⁷]量はない。故にこの二つは、破綻している。」と言われている。〈382〉

[量なしで所証は成立しない。³⁸]一切が空性とは如何なるものか。[常住な一切法が空性という意味である³⁹。][所取と能取の形相を離れることを超感官でなく知ることが空性である⁴⁰。]またそこ（一切空性）で量とは如何なるものか（i.e. 知性・認識性等⁴¹）を後に示

³³ (Ya) 56a7

³⁴ (Ya) 56a7

³⁵ (Ya) 56a7-8

³⁶ (Ja) 223a7-8

³⁷ (Ya) 56a7

³⁸ (Ya) 56b1 また Yamāri は世俗の量について言及する。(Ya) 56b1-3 「[敵者が]「しかし世俗の量（*samvṛti-pramāṇa）に依存して、空性が成立する」と言うならば、そ[の世俗の量]には感受があることから空性はないと、どうして確定しないのだろう。ここにおいて、世俗性より他の過失は語られるべきではない。世俗としての成立しているものは認められているものだから、どのようにして一切が空性として成立しよう。」

³⁹ (Ya) 56b4 ただし Derge 版 48a1 より直す。

⁴⁰ (Ja) 223a8

そう。ここでどうして急ぐ必要があろう⁴²。 <383>

3.1 p.54,21-23 チャールヴァーカ「身体は父母に依存して、前世から
来たものではない」

p.54,24-27 [答論] <PV 36,37a>

もし [Cārvāka 派が] 「[この世に生ぜしめられた⁴³] 身体は大種を自性としているから、[この世に生まれた子供の] 諸感官(根)は、母父の身体等に肯定関係・否定関係に随順しており、必ずそれ(父母の身体等)⁴⁴に依存するのである⁴⁵。[また心は身体のみからあるいは父の心より生じている⁴⁶。] 別様には[則ち] 前世 (para loka) から来た者としては、[それら諸感官は] 知覚されない。故にどうして前世の有性を主張する説 (Paralokāstitvavāda) が適切であろうか⁴⁷」と言うならば、それは正しくない。何故ならば⁴⁸

呼気・吸気・感官・心が、自己の種(相続)に依存せず身体のみから生じることはない。生を受けるとするならば、過大過失となって

⁴¹ (Ya) 57a2

⁴² その他 Śāntarakṣita 説や MAV を引用する Yamāri 説は拙稿(印仏研四十七巻)を参照のこと。

⁴³ (Ya) 57a4

⁴⁴ [Franco] p.167,13 は「身体を形成する大種」としている。

⁴⁵ (Ja) 217b5-6 は「[この世より] 別の修習のみによる、一切のその相違より生じているものが知であるから、相違のない事物だけが身体から最初に成立している。修習によって特別になっている。」と説明する。

⁴⁶ (Ja) 217a8

⁴⁷ PLS p.23,17f. -- ma'i blo las bu'i shes pa rab tu skye ba'i phyir 'jig rten pha rol ma grub po / 「母の心から子の知が生じるから前世は成立していない」。また (Ja) 217b3-5 では「[敵者が] 「祖父の修習から生じているのである」と言うならば、違う。幼児は自ら、修習の如く結生するのである。[意識的な] 自らの修習[より結生する]ではないのである。[前世の修習は] 子宮にある ('dug pa) 等の多くの苦しみによって忘れることがあるから。」としており、ここでは一般的に言われている産道を通る苦しみによって忘れるとはされていない。

しまうから⁴⁹。<<PV II 36, 37a>>⁵⁰

3.1.1 p.54,28 [理由1] 呼気等は特別な自性を持っている

(理由1) 実にく呼気>等は、変動し易さ (apalatā) 等によってできている、
[自らの修習によって生じた⁵¹] 特別な自性をもっていることから、[父母の自性とはならないので、以前の質料因たる前世の⁵²] <自己の種に依存しない>ということは合理ではない。

3.1.2 p.54,28-30 [理由2] 呼気等は自己への修習に随伴する

(理由2) 更に[その呼気等の自性である] 変動し易さ等は、自己[の以前の心と感官等]の修習に肯定的随伴をするが、母父の修習に肯定的随伴をしない(以前の質料因としての父母の修習は必要ない⁵³)。そうでない[則ち自己の修習に随伴せずに父母の修習に随伴する]ならば、不良の[人間⁵⁴]に近づくこと⁵⁵[あるいは論書を見て父とは違った性質を修習すること⁵⁶]等によって[も]、[母父の性質を有しない者となっているのに]母父の無自性⁵⁷はないこと[則ち母父の有自性]になってしまおう。それ故にく自己の種に依存しない>母父の身体のみから[諸感官が生じることは]ない(=paryudāsa⁵⁸) [、自己の修習に依存する]。[愚者の子に賢者が経験されることもある⁵⁹。]

3.1.3 p.54,30-31 「父母の身体も原因である」ことも不合理

⁴⁸ この4行は[稲見6] p.23 に和訳がある。

⁴⁹ [稲見6] p.12 参照。(Ja) 217b2 は「吸気等と心と諸感官も堅固であり、動作者等の修習によってそのようになるのである。」と説明する。

⁵⁰ R.Hayas, "Dharmakīrti on Rebirth," 『渡辺文麿博士追悼記念論文集』(上) 1993, p.117 に英訳がある。

⁵¹ (Ja) 223b3-4

⁵² (Ya) 57a7

⁵³ (Ya) 57a7-8

⁵⁴ PVT(Ra) 165a8 による。

しかしもし「以前に、意楽 (abhiḷāṣa) 等が母父の自性である⁶⁰場合、〔子にその意楽が成立しているならば〕母父等⁶¹の身体も原因である<別解 1>〔しかし<別解 2>幼児の自性のすべてが父母の自性である場合、母父の身体こそが原因である⁶²。〕」⁶³という〔ならばその〕ことは不合理である⁶⁴。

3.2 p.55,1-2 前世の修習がない場合の矛盾<atiprasaṅga の1つ目の解釈>

もし前世〔の修習〕に決して依存せずに、<生を受ける>ことが容認されるならばその場合、〔三つの現量と非知覚という因果を決定する方法はない上に⁶⁵、呼気等は変動し易さ等がないことになろうから〕容認されつつある<生を受ける

⁵⁵ [Franco] p.168,1 では、unwholesome [object] とする。おそらく Vimś p.9,16-20 近辺の議論と平行の記述であると思われる。則ち「悪友と善知識に近づく (pāpakaryāṇamitrasamparka) 」 (Vimś p.9,18) ことによって、「身体の不善なる所作の仮設 (*vijñapti) 」と「善なる所作の仮説」がそれぞれある (VimśṬ 227a2-3) が、そのパラフレーズとして「正と非正に近づく」 (sadasatsamparka) (Vimś p.9,19) とされている。また「正法と非法を聞くこと (sadasaddharmaśravaṇa) 」 (Vimś p.9,18) によって「語の、悪等が静まる所作の仮設」と「語の、悪等に入る所作の仮設」 (VimśṬ 227a3-4) がそれぞれあるとされる (以上、山口益・野沢静証『世親唯識の原典解明』法蔵館、s.28 を参照した)。以上総合して、「不良 (asad =dam pa ma yin pa) に近づくこと」を「悪友に近づくこと」と解釈したい。則ちラヴィグプタの説が正しい解釈であると思われる。またヤマーリの解釈も Vimś から乖離しているものではない。この辺ブラジュニャーカラグプタが Vimś を熟知していた証左の一つとして出し得る。

⁵⁶ (Ya) 57b1-3

⁵⁷ -svabhāva を Tib. より -niḥsvabhāva と読む

⁵⁸ (Ya) 57b6

⁵⁹ (Ja) 217b3

⁶⁰ -svabhāve を Tib. より -svabhāvo と読む。

⁶¹ [Franco] p.168, n.6 ではこの「等」の語を消した方がいいとする。

⁶² (Ya) 57b7-58a3 のように、Yamāri は二つの解釈を出している。

⁶³ PVṬ(Ra) 165b1 はこれを立論者の説としている。

こと>にく過大過失>がある。[則ち]まさに一切の因果関係は滅してしまうであらう⁶⁶。[また前世の修習は記憶されない。一切の潜在印象を分断する死の死と、子宮にあることの苦によって分断されるから⁶⁷。]

3.2.1 p.55,2-6 因果関係は必ず保持される、同種の修習から生じる

また[しかし修習を考えた場合の]それ(因果関係)は比量章によって⁶⁸判断されることから保持される⁶⁹。

もし⁷⁰一切の呼気吸気等が修習に基づくならば、[この世に生まれることによって]自己の修習を欠き依存[則ち原因]のないものであるということが、どうしてあろう<384>⁷¹。

何故ならば、これ(自己の修習があるか、原因があるもの)が[生という]結果

⁶⁴ iti yuktam を Tib. より ity ayuktam としておく。Cf. text の note 7. また PVṬ(Ra) 165b2-3 は「賢者の心から、弟子が知の生起を有するものと、容認されているのではない。師匠は、単独で一人のみである。師匠によって語られる場合、自ら意樂の修習力によって、性質(ダルマ)を捉えるのである。同様に、母等の性質(ダルマ)を捉えるこのことも、自ら意樂を修習するのである。」と解釈する。また PLS p.30,8f. blo gzhansngon du 'gro ba can nyid yin na yang bu'i blo ni ma'i blo las rab tu skye ba can yin no shes gang smra ba -- / 「別の心に基づいている場合でも、子の心は母の心より生じているのである、と語ることは――」云々と。

⁶⁵ (Ya) 58a4-5. Yamāri は因果関係決定の上で所謂三種論者である。

⁶⁶ この2行[稻見6] p.24 に和訳がある。

⁶⁷ (Ja) 223b5-6

⁶⁸ [Franco] p.188, n.8 よりこのままにしておく。また Jayanta の pratika (224a2) も同様の記述である。

⁶⁹ PVṬ(Ra) 165b6-7 も同様に解釈する。

⁷⁰ (Ya) 58a5-6 「因果関係が成立することによって、原因の非知覚によって、異類例からの排除が成立する」と説明する。

⁷¹ 論証式の形をわかりやすくすれば次のようになる。主題は「この世に生まれること」であり、証因は「一切の動作は修習に基づく」ことであり、帰結は「自己の修習より生じる」ことであろう。

の性質（ダルマ）であり、[自己の修習という]因を分断して[自己の修習とは]別様に生じることがないものなのである。そうでない[則ち非因として生じる⁷²]ならば、それ（結果）はそれ（原因）にとって生じられたものではない。能生・所生関係は[例えば動いているものを見ると、順次にある二つの現量によって⁷³]肯定的随伴・否定的随伴からある[からである。アルチャタの説の如し⁷⁴]。それ故に[動く等の性質を有した⁷⁵]眼等は、同種の[動く等のもので⁷⁶]修習から⁷⁷生じる[様態となった⁷⁸]眼等に必ず依存しているのである。

3.2.2 p.55,7-11 [反論1]「因果は別種である」

[反論2]「因果であれば別種となる」

「しかし

(批判1) もし[同種の修習から結果が生じるとするならば]別の⁷⁹煙から煙が⁸⁰生じる[と汝が言うそれ]は、すべての場合[煙は火から生じるのであり]煙から生じることは[ありえ]ない⁸¹。[汝の説では]蓮根⁸²(の根⁸³)も蓮根(の根)から生じるのであり、どうして牛糞より[生じるという事実を説明しよう]か⁸⁴<385>

⁷² (Ya) 58a7 また (Ja) 224a4-5

⁷³ (Ya) 58a8-58b1

⁷⁴ (Ya) 58b2. 例えば HBṬ p.74,6-7 anvaṅvyatirekayor hi pratibandho nibandhanam, tena(=pratibandhena) tayoh(=anvaṅvyatirekayoh) vyāpṭeḥ, tad(=pratibandha)abhāve tayor(=anvaṅvyatirekayor) apy abhāvāt. また HBṬ p.225,21-p.226,16 にも anvaṅvyatireka の議論がある。

⁷⁵ (Ya) 58b2

⁷⁶ (Ya) 58b2

⁷⁷ abhyāsa を Tib. より abhyāsato と読む。

⁷⁸ (Ya) 58b3

⁷⁹ Tib. 欠。

⁸⁰ Tib. 欠。

同様に

画は画工から生じる [のが正しい]。 [しかし多彩な⁸⁵ 鳥においても、どうして同様 [則ち画工から生じることが] であろう⁸⁶。(批判2) そのように⁸⁷ [現実には] およそ修習より相違し [て生じ] たもの (x)、それ (x) は [同種のもを生じることではなく、同一な因とは] 別様にさえもなるであろう。 <386>」

3.2.2.1 p.55,12-14 [答論1] 煙は同種因より生じる

それもありえない。

(答論1) [同類因たる] 煙より生じた [等流果としての] 煙⁸⁸の如きもの、それは別なもの (火⁸⁹) から生じるというわけではないの

⁸¹ PLS p.25,3-5 -- ji ltar du ba 'phyur ba'i skad cig dang po mc las skye ba thob la / skad cig gzhan dang gzhan ni rang gi rgyun kho na las skyes pa thob pa ltar --/ 「煙が生じる最初の刹那が火より生じることを得る場合、それぞれの刹那は、自らの相続のみから生じることを得るように、――」。Jayanta は (Ja) 218a2 「蓮華の根は牛糞より生じ、蓮華の根よりも生じると経験される。」と答論する。

⁸² PVT(Ra) 165b8 は s'a lu と音写する。

⁸³ (Ja) 218a2

⁸⁴ PLS p.29,22f. dper na s'a lu'i sa bon las 'byung bar mthong ba'i s'a lu'i myu gu de ni de las gzhan las mi 'byung ba -- / 「例えば蓮華の種子から生じることを経験するその蓮華の芽は、それ [蓮華の種子] より他より生じない――」。また HBT p.161,8-p.162,15 参照のこと。

⁸⁵[Franco] p.169,11 を参照した。

⁸⁶ PLS p.27,7-9 ji lta bur bum pa ni 'jim pa las de'i bdag nyid dang / rdza mkhan las dbyibs kyi khyad par dang / de dag las gzhan pa rnams las ni rang bzhin gzhan rnams 'byung bar rtogs pa -- / 「壺が、土からそれ (土) の本性と、陶工から形の特異性と、それら (その土とその陶工) から別の諸から別の諸の自性が生じることを知るように――」。

⁸⁷ Skt. 欠。

⁸⁸ Tib. 欠。

である⁹⁰。

3.2.2.2 p.55,15-16 [答論2] 幼児は同類因によるのではないが、
修習によって前世と同種である

(答論2) 一方およそ[同類因によらずに]修習から相違し[て生じ]ているもの(x) (有為法⁹¹)、それ(x)も⁹²生の最初[たる幼児⁹³]において[まさに同じ有法として前世と⁹⁴]同様に[相違の言葉が⁹⁵]確立している。[別の生の修習のみによって作られている⁹⁶。] <387>

(答論2を解説する) [修習は輪廻のための一切の潜在能力(*saṃskāra)を形成するのであるが⁹⁷] およそ[修習によって]相違したもので、[前世の]聞の修習等によって生じさせているもの(X) (例; 幼児におけるダルミン)、それ(X)は[前世の因と]同様になっているものであり、こ[の世]の生の⁹⁸修習を欠いても経験されるのである。則ち

3.2.2.3 p.55,16-20 [答論2] を論証式化する

(宗) そ[の前世]の修習に結合したもの(輪廻の原因である潜在印象を有する者)は、[前世が非知覚であることによって]拒斥される、とい

⁸⁹ (Ja) 218a4

⁹⁰ jñāyate を Tib. より jāyate と読む。また Jayanta は火より生じない煙の例として「牛飼いの壺の煙」をあげる (Ja) 224b2)。

⁹¹ (Ya) 58b7 だが、(Ja) 224b3 は「ダルミンの言葉」とする。

⁹² Skt. 欠。

⁹³ (Ya) 58b7

⁹⁴ (Ya) 58b7-8

⁹⁵ (Ja) 224b4

⁹⁶ (Ya) 59a1-2

⁹⁷ (Ya) 59a1

うことはない。

(因) 何故ならば [前世の修習とは] 別の場所 [則ちこの世] においても過去の修習を、そ [の別の場所たるこの世で] の時間に知覚することは不可能であるから。

(喩) 例えば [この村とは] 別の村から来た者の [過去の] 修習 [が知覚されない] 如し。

まさにそれ故に [この世の結果は] 前世のものでない [この世の] 修習に基づいていること (説) でさえも、[汝は] 証明しない。何故ならば原因 (修習) を伴って結果 (潜在能力をもつ者⁹⁹) が結合するから。[更にこの世では] 経験されない [前世の修習という] 原因にもその結果 (この世での出生) があるから。別の場所の修習に基づいた性質も [この場所での性質を] 成立させるのである、と¹⁰⁰

3.2.3 p.55,20-24 [チャールヴァーカ説]

ここで、それ (敵者の議論) 故に愚者¹⁰¹の説話が齎らされる。

ある [別の¹⁰²] 愚者は「 [遠くにある¹⁰³] 有角という水牛¹⁰⁴に [衆中尊という水牛の¹⁰⁵] 母なる立場がどうして生じよう、と語りなさい」と他者達によって質問される¹⁰⁶。 <388>

彼は言う。「 [しかし] これら水中尊は、 [そもそも水中尊の] 母の腹より [も] 生じない。一方、市場からやってきたこれらには、

⁹⁸ iha janmā- → ihajanmā- と読む。

⁹⁹ (Ya) 59a4

¹⁰⁰ この直前のチベット語訳なし。サンスクリットの混入であろうか。

¹⁰¹ tauta については [Franco] p.170, n.19 に考察がある。

¹⁰² (Ya) 59a6

¹⁰³ (Ya) 59a6

¹⁰⁴ dṛṣabhasya を Tib. より ṛṣabhasya に読む。

¹⁰⁵ (Ya) 59a6

値段によって与えられるのみである」¹⁰⁷ [と] ¹⁰⁸。 <389>
まさにこのこのような [論] が、チャールヴァーカ派¹⁰⁹の考えである。

3.3 p.55,25-26 大種生に対する批判<atiprasaṅga の2つ目の解釈>¹¹⁰
あるいはまた、 [p.55,12に続き] <過大適用の過失となるから>というのは、
[説明すれば以下の如くである。] もし別の世から来ることなくして、まさにそ
れらの大種からの結果 [たる身体] が心性を生じるならば、どうして [死者を含
めた¹¹¹] 一切の生類の自性が生起してしまわないだろうか¹¹²。

3.3.1 p.55,26-27 [反論] 「大種の転変差別により特別な生が生じる」
[答論] それは経験されない

「特殊な転変（転変差別）が実在だから [一切の生類の自性は生じない] 」と
言うならば、 [死者に¹¹³] まさにその転変差別はどうして [生じ] ないのかと、
[汝に対して] 同じ批判（ paryanuyoga ）がなされる。

3.3.2 p.55,28-29 [反論] 「転変の前後で心の相違が経験される」

「あるいは、およそある生類達（生者の身体¹¹⁴）があり、 [その生類達より]
別のもの（死体¹¹⁵）はない [という] 理由から、無始の転変 [もないし] あり

¹⁰⁶ drṣṭah を Tib. より prṣṭah と読む。

¹⁰⁷ traya- を Tib. より deya- と読む。

¹⁰⁸ この二偈は読解が困難である。[Franco] p.170-171 では、Śānti sūri の
Nyāyāvatārahāvārtikavṛtti においてこの二偈を発見している。

¹⁰⁹ (Ya) 59a5

¹¹⁰ PVṬ(Ra) 166a4 も同様に二種に解釈する。

¹¹¹ (Ja) 225a8

¹¹² この2行 [稲見6] p.24 に和訳がある。

¹¹³ (Ja) 218b1

¹¹⁴ (Ja) 225b4

は¹¹⁶ [転変の前後で] 相互に相違するように¹¹⁷指示されている¹¹⁸如何なるものもない¹¹⁹ [と言うならば]

3.3.2.1 p.55,29-32 転変によって相違は経験されない

それもありえない。

もし¹²⁰、転変による相違が経験されないならば、こ [の転変によって大種から心性が生じるという] 構想は何であろう [、必要ない]。経験に適しながら経験されないものは、有であるという言説の対象ではない¹²¹。<390>

もしかの転変に相違があるとするならば、[その転変の相違は必ず] 知覚されるはずであろう。

3.3.2.2 p.55,32-56,1 修習のみが結果として経験される

「しかし [特別な経験の原因が修習であるならば、経験も知の対象ではない¹²²。] 結果の経験のみから [転変による相違が] 構想される」 [とする] のであれば、そうであるならばまさに構想される (則ち確定される) べき修習が経験される [則ち因として確実に知られる¹²³]。何故ならば経験されないもの (転変) を構想することは [甚だ¹²⁴] 要領を得ない (kalpanāgaurava) から¹²⁵。[事物の本性 (例 ; 煙にとっての火¹²⁶) でなく、性質 (ダルマ) の相違 (例 ; 地面の転変差

¹¹⁶ 前後の単語が女性形と男性形と相違するので vā は Tib. 欠だが読む。

¹¹⁷ param parāviṣeṣa を Tib. より paramparāviṣeṣa と読む。

¹¹⁸ Tib. は an- と読み得るが、Skt. を採る。

¹¹⁹ kaścīd asti を Tib. より kaścīn nāsti と読む。

¹²⁰ Skt. には sa があるが、Tib. もなく、また metre の関係より取る。

¹²¹ yo を na に読む。

¹²² (Ja) 225b5-6

¹²³ (Ya) 59b4

¹²⁴ (Ya) 59b6

別によって生じる煙)を分別することになってしまう¹²⁷。]

3.3.3 p.56,1-2 [帰結] 生類は同種の生存に基づく

そのことから生類等は同類の¹²⁸生存に基づくというのが正しく言われている。
[修習が原因であって、①結果であるという説②自性であるという説③徳であるという説、を否定しているのである¹²⁹。]

4. p.56,3-6 諸因が成立しないならば来世はない

現世にあるものは来世でも結生する<PV 37bcd>

「もし[火から煙が生じる如く]結果[が正しい因果関係であること]から前世の者である¹³⁰諸因が成立するとするならば後の世の者達をどうして比量しよう¹³¹ [、比量できない、結果による証因・自性による証因もありえない¹³²]」[と言うならば]それを[説明して]言う。

[この世において自性が現量によって¹³³結生能力のあることが経験されるあるもの(X)¹³⁴、それ(X)に後においては¹³⁵存在せず、それによって[後世]結生しないものがどうしてあったであろうか

¹²⁵ Tib. は「--の場合困難であるから」

¹²⁶ (Ya) 59b5-6

¹²⁷ (Ya) 59b5-6

¹²⁸ *saprāna* を Tib. より *saṃāna* に読む。

¹²⁹ (Ya) 59b7-60a1. ここにおいて Yamāri のチャールヴァーカに対する批判が3つであったことが明確に知られる。

¹³⁰ *-janmabhāviṇām* を Tib. より *-pūrvajanminām* と読む。

¹³¹ Tib. は散文でなく韻文であるとしている。

¹³² (Ja) 225b6-7

¹³³ (Ja) 226a1

¹³⁴ *yadi* を *yad* に読む。

¹³⁶。 <<PV II 37bcd>>

[経験による潜在印象をもつ者より以前の生存を比量しつつあるとき、その比量より¹³⁷] ずっと以前¹³⁸ [の生存] は、能比量 (今世) ¹³⁹・所比量 (前世) ・比量 (同類の修習がある) 等によって [前世も比量によるあり、その前も比量されたものの比量よりあり¹⁴⁰、順次としてあるので無始として] 結生すると決定されている¹⁴¹。

4.1. p.56,7-9 [反論] 「前後の生は分断している。無始でも無終でもない」

もし「動きやすいもの (呼吸) 等がそ [の動きやすいもの¹⁴²] の修習から¹⁴³、不動・遅鈍等の相を持った動かないものより生じる。一方それ (精神? 修習? 動かないもの? 不動・遅鈍?) ¹⁴⁴は大種のみより [生じる]。 [以下 Skt. 欠] その [動きやすいものが結果的には大種から生じる] ことによって、それ [大種] よ

¹³⁵ PVT(Ra) 166b4 では「死ぬ時間に」とする。 (=PVV p.21,12)

¹³⁶ 未来原因説を根拠づける偈として今までに、PV の svārthānumāna 章の k.7 や ([小野] p.880)、 pramāṇasiddhi 章の k.49 が ([護山] p.47) 上げられているが、この偈も輪廻に 응용された偈として注目し値する。そして特に [生井] p.515-530 において詳論されている。今までに輪廻の無始性の議論は行われていたが、未来原因説を視野に入れた場合には輪廻の無終性が問題とされる。

¹³⁷ (Ya) 60a3

¹³⁸ pūrdhva- を pūrvva- と読む。

¹³⁹ anu'māna を anumāna と読む。

¹⁴⁰ (Ya) 60a3-4

¹⁴¹ 意味が取りにくく、復注にも説明がない。おそらく jāti(0) と jāti(-1) の関係が成立すれば、同じ根拠によって jāti(-1) と jāti(-2) の関係も、jāti(-2) と jāti(-3) の関係も成立するという意味であろう。

¹⁴² (Ja) 226a3

¹⁴³ abhyāso を Tib. より abhyāsena と読む。

¹⁴⁴ sā という女性形が指すがは不明。しかし (Ja) 226a4 「不動・遅鈍」とする。

りも前世は成立しない。それ故に無始の生の相続は成立しない。[更にまた] 無始性がない場合 [ここまでSkt. 欠¹⁴⁵] 煙から別の煙が生じても [別の煙と] 常に結合するということは [ありえ] ないのである。それ故に煙の如く分断することも [ありうる] ことから、[無始性のみならず] 生類の無終性もないのであり、前 [世] のない有情が現前する [のが正しい] ことから [汝の説は] 過失となる¹⁴⁶。] [と言うならば]

4.1.1 p.56,9-15 有の無始性は修習 (自性ではない) によって説明される。覚醒時が夢中の修習からあることが譬喩とされる
それもありえない。

諸生類の遅鈍性も、遅鈍の働きの修習によってある。それ故にそれ
[動きやすいもの] も、それ [動きやすいものの修習¹⁴⁷] に基づい
ているので¹⁴⁸ 無始の有の循環がある。 <391>

遅鈍等の種類は、諸生類の自性からあるのではない。しかしながら同類の修習からあるのである。動きやすさ等がその修習からある如く、その如く遅鈍等も怠惰な修習からある。よって輪廻の無始性が成立する。[覚醒時の] 眼等の遅鈍性は、夢等の修習からある¹⁴⁹ のである。それ (遅鈍¹⁵⁰) から睡眠から覚醒 [した者の]¹⁵¹、動きやすい眼等は動きやすい眼等によって、他 (他の不明の眼¹⁵²) は他 (不

¹⁴⁵ text の note 2 に還梵が載せられている。ただ bryud pa を Rāhula は prabandha とし、[Franco] p.174, n.8 では pratibandha とする。santāna では不可能であろうか。また Yamāri 注の中では prtika が存在しない。

¹⁴⁶ doṣāḥ を iti doṣāḥ と読む。

¹⁴⁷ 「修習」の部分のみ (Ja) 226a8 による。

¹⁴⁸ sāpāty を sāpity に読む。

¹⁴⁹ abhyāso を P より abhyāsato と読む。D min は採用しない。

¹⁵⁰ (Ja) 北京版になし。Derge 版 200a2 より入れる。

¹⁵¹ [Franco] p.195, n.9 を採用して、suptaprabuddhasya と読む。

¹⁵² (Ya) 60a6

明の眼)によってあるとするのが合理的なのである。それ故に〔同様に〕生の最初(幼児)においても、睡眠より覚醒¹⁵³〔した遅鈍としてある眼〕の如く、現前して実在する¹⁵⁴習気の覚醒には、〔遅鈍として〕現前する眼等が結合するのである。

4.2 p.56,15-16 [反論] 「感官がどうして別の身体へ結生するのか」

「別の身体にある¹⁵⁵眼が、どうして別の身体に結生するのか」〔と言うならば〕別の事物にある能力が、どうして別の場所に移行するのか¹⁵⁶〔について考える〕。

4.2.1 p.56,17-18 別の身体にある能力が業の力より別の身体に移行する。夢の身体のように

マントラ・タントラ等の力によって、毒の諸能力が砂糖等に〔なる〕。まさにそのように、業の力によって諸感官の能力が別の身体に〔移行する。感官等が移行する場合、その時心も移行する¹⁵⁷〕。

<392>

例えば¹⁵⁸夢中の¹⁵⁹身体¹⁶⁰が、怖れを乗り越えて走ることによって覚

¹⁵³ Tib. は「覚醒」なし。

¹⁵⁴ Tib. 欠。

¹⁵⁵ Tib. 「に依存する」。

¹⁵⁶ (Ya) 60a7 より定説として考える。

¹⁵⁷ (Ja) 218b5

¹⁵⁸ (Ja) 219a2-3 「あるいは覚醒した身体より感官等が夢を見る者の身体に入っていることを経験する如し。それ(夢を見る者の身体)からも覚醒した身体の場合である。同様に前世の身体より中有の身体の場合である。それ(中有の身体)からもこの身体にあるから拒斥する場合、答えを与え易いことは決してない。」として説明する。この文脈の解釈で、彼は Yamāri の解釈と異にしている。更に彼は感官等は前世の身体より来たのであることを (Ja) 219a7 「夢を見る者の身体のように、中有の身体よりやってきた」と説明する。

¹⁵⁹ (Ya) 60a8 は理由を「夢ではそ〔の夢〕の時間の〔外部にある〕事物を知覚しないからである」とする。

醒時の身体の変化（投げる、打ち付ける等¹⁶¹）のためにある如く¹⁶²、同様に別の生においても〔別の生の修習からこの世の身体の変化がある¹⁶³〕¹⁶⁴。〈393〉

4.2.2 p.56,19 〔反論〕「夢中の身体は非真実である」

〔答論〕 真実・非真実は世俗に過ぎない

「しかし〔夢の身体は非真実であり、覚醒時の身体は真実であるので¹⁶⁵〕これ（夢中の身体）は真実を欠く」〔と言うならば〕むしろその〔非真実であるとした愚者に依存した¹⁶⁶〕方がよい。〔顕現がある場合、非真実であるのは不合理であるし、外部の非真実性は、覚醒者によっても同じである¹⁶⁷。夢中でも顕現と効果的作用はあるのだから¹⁶⁸〕およそ非真実（夢中の身体）も〔覚醒時の身体の〕変化のためにある場合、真実によって¹⁶⁹〔夢の身体に対して〕何を語ろう〔、夢を見る身体をも現証するとき、真実のみなのである¹⁷⁰〕。

¹⁶⁰ [Franco] p.175,22 の訳及び p.176, n.11 は svapnāntika の言葉を取り違えている。

¹⁶¹ (Ya) 60a8

¹⁶² TSP p.643,17-18 nanu cāhārasvāpādinā dehasya puṣṭādivikāre sati rāgādilakṣaṇā manomater vikārapattir dṛśyata eva? yadi nāma dṛśyate tataḥ kim! 「『もしまた食事の夢によって身体の増大等の変化があるならば、食等の相をもった、意識の変化があることが、必ず経験されるはずだ。』もし経験されるならな、そのことから何があるというのか。」

¹⁶³ (Ya) 60a8-90b1

¹⁶⁴ 夢中身体が覚醒時の身体と類似するという説に批判する例として (Ja) 219b2 「禪と正禪と最後の諸〔禪〕」における別の知が出されている。

¹⁶⁵ (Ya) 61b1

¹⁶⁶ (Ya) 60b2

¹⁶⁷ (Ja) 219a4

¹⁶⁸ (Ya) 61b2

¹⁶⁹ sattyē tu を Tib. より sattyena と読む。

<394>

この真実・非真実性ということも世俗のみである。〔また勝義有たる〕自相が現前する場合真実性等〔という世俗〕がある、という〔議論〕は困難である¹⁷¹。<395>

4.2.3 p.56,21-23 〔帰結〕因（業と煩惱）によって結生することが生じる

それ故におよそずっと以前に、<結生¹⁷²能力〔力〕のあることが>知覚されるもので、<後においては><存在せず>、そのないことによって<後〔世〕においては¹⁷³結生しない>というものに、余分のもの（議論の余地）が<どうしてあったであろうか>。実に原因が不十分である場合結果はないが、一方〔結果を生じるための〕一切の因が〔業と煩惱によって¹⁷⁴〕完全である場合¹⁷⁵、〔質料因は力があるので¹⁷⁶〕結果が生起しない、ということは否定される（vyāhata）¹⁷⁷。〔煙が減少するように心は減少しない。質料因の力とは、煙とは矛盾するが、心とは矛盾しない。夢中の身体のように、最後に身体（身業）と言業（口業）を放棄し

¹⁷⁰ (Ja) 226b7

¹⁷¹ Jayanta は感官の移行の議論を心の移行の議論に捉え直して論証式化する。
(Ja) 220a3-4

「〔宗〕心は修習所生のそれと類似した心である。

〔因〕その心が相違という相違を有しているから。

〔喩〕感官〔が類似した感官として修習所生である〕ように。」と。

¹⁷² pratisanghāta を Tib. より pratisaṃdhāna と読む。

¹⁷³ Tib. の gyis は physis であろう。

¹⁷⁴ (Ya) 60b4-5

¹⁷⁵ kalāvati は [Franco] p.196, n.13 の解釈で正しいであろう。

¹⁷⁶ (Ya) 60b5

¹⁷⁷ この一文は小野氏も未来原因説を提示する重要な文であると判断されて、和訳されている（〔小野〕 p,881）。

ても心（意業）は放棄しないのである¹⁷⁸。]

4.2.4 p.56,24-26 能力のある原因は必然的に結果を生じること

「しかしこの場合否定 (vyāghāta) とは何か」 [と言うならば¹⁷⁹] 「[あらゆる原因は能力を有しているが、それから必ず結果が生じるわけではないのである。よって¹⁸⁰] まさにこれ（否定）は因果関係のないことではないか¹⁸¹] [と自問する。]

原因が一切の状態¹⁸²として同じであっても、[否定されるということが] もし結果がないことであるならば、結果が自律的 [に生じるという矛盾] となろう。そう [結果が自律的に生じるもの¹⁸³] であるならば、それ（原因）は諸結果を生じない [であろう、しかしそれはありえない]。 <396>

結果は原因に他律的であるので、その能力のある原因は、必然的に [結果を] 生じるのである。そう [原因に能力が¹⁸⁴] あっても [状態としての結果が¹⁸⁵] 無であるならば、結果はないであろう [、自律していることになるからである¹⁸⁶]。

4.2.5 p.56,27-57,1 「肯定的随伴 (anvaya), 否定的随伴 (vyatireka) による反論」と、それへの答論

「しかしそれ（原因）がない場合、[結果は] ありえない (=vyatireka) とい

¹⁷⁸ (Ya) 60b5-61b1 をまとめる。

¹⁷⁹ (Ya) 61a1

¹⁸⁰ (Ya) 61a1

¹⁸¹ (Ya) 61a1-2 よりこれは定説である。

¹⁸² Tib. では「自性」とする。

¹⁸³ (Ya) 61a3

¹⁸⁴ (Ya) 61a3

¹⁸⁵ (Ya) 61a3-4

¹⁸⁶ (Ya) 61a4

うことから結果がある¹⁸⁷。〔種が近くにあるとき、集合〔因〕が異熟のみに依存して芽を生じるからである¹⁸⁸。則ち因がない場合、果を生じる異熟はありえない。〕〕〔と言うならば、〕それ（原因）がない場合、〔結果を〕生じないということがどうし〔わかる〕だろう。

もし「それ〔原因〕がある場合、必ず〔結果が〕ある（=anvaya）というこのこともどうして〔わかる〕だろう」〔と言うならば〕何故ならば〔因として確認される究極の刹那をもつ種子から芽が生じることが経験され¹⁸⁹、〕そのように〔必ず生じるという肯定的随伴を¹⁹⁰〕分析され〔因から結果が生じる〕から。〔同様に〕それ（因としての種子）がない場合〔結果としての芽が〕ないということも、まさしく分析されるのである。

「何故すべての時間に〔ありえないのか〕」というならば、〔汝と私の〕両方の場合とも〔条件は〕同じである。それ故に経験される如くその如く容認されるべきであり、〔肯定的随伴と否定的随伴の¹⁹¹〕両者とも知覚されるのである。

それ（原因）がある場合〔結果が〕必ずあり、〔原因が〕満たされない場合〔結果が〕決してないという¹⁹²〔肯定的随伴関係と否定的随伴関係の〕両者とも容認されるべきである¹⁹³。

4.2.5.1 p.57,1-5 「肯定・否定的随伴は直接経験されない」不二の経験

¹⁸⁷ kāryam を kāryam / と区切って読む。

¹⁸⁸ (Ya) 61b2

¹⁸⁹ (Ya) 61a7-8

¹⁹⁰ (Ya) 61a8

¹⁹¹ [Franco] p.177,18-19 も同様に解釈する。また (Ja) 227b5-6 も同じい。

¹⁹² -kalyena を Tib. より -kalye na と読む。

¹⁹³ TS 1894cd anvayavyatirekābhyāṃ niścitaś ca svasantatau //, 「また自己の相続において、肯定的随伴・否定的随伴から確定がある。」 cf. 生井「TS における前世の論証（2）」『密教文化』162, 1987. TSP p.640,23 evam anvayavyatirekābhyā asandigdham kāryakāraṇatvaṃ pratiyate, nānyathā. 「このように肯定的随伴・否定的随伴によって、疑いなく因果生が知られる。別様ではない。」

のみ

「[しかし勝義には¹⁹⁴] 同様 [則ち肯定的・否定的随伴のよう¹⁹⁵] に経験されないことから¹⁹⁶、[前後に] 因果関係はない¹⁹⁷。

肯定的随伴関係も否定的 [随伴関係] も遍充するものとして [直接的な] 経験はない。この因果関係にどうして経験があろう」 [と言うならば]¹⁹⁸。 <397>

もし [肯定的・否定的随伴による] 遍充するものとして経験しないということから、因果関係が成立しないとするならば、 [? 六つの業は相違した四つとなるが¹⁹⁹] そのような場合、不二を除いた如何なるものの経験もない²⁰⁰、というこのことが [既に次のようにダルマキールティ師によって] 言われている²⁰¹。「知はそれ自身 [だけ] がそれ自身で知られる」²⁰² (PV II 4d)、と。

4.3 p.57,6-7 [唯識説]

[ある生起したものが、身体をもつと認められるならば、認識こそが身体を有している²⁰³。よって] 来世はない、この世はない、来世の証明はない、疑いはない、

¹⁹⁴ (Ya) 61b5-6

¹⁹⁵ (Ya) 61b6

¹⁹⁶ adṛṣto を Tib. より adṛṣtato と読む。

¹⁹⁷ Tib. を取り、Skt. の iti cet とは取らず。Tib. に従って <397> までを敵者説とする。

¹⁹⁸ Tib. の zhe na を取る。

¹⁹⁹ (Ya) 61b7-8 だが意味不明。

²⁰⁰ anvaya- を Tib. より advaya- とする。

²⁰¹ PLS p.30,10-12 'di ltar shes rab phul du byung ba ni rjes su 'gro ba dang ldog pa dag las sngar gyi goms pa'i rgyu can du 'gyur zhing gzhan gyi rgyu can du rtags par mi nus so / 「このように、最高の般若は、肯定的随伴と否定的随伴から、以前の修習を因とするのであろうが、別の因と仮設することはできない」。

²⁰² この箇所は二種類の解釈が成立し得るが ([稲見2] p.23-26)、ここでは Prajñānakaragupta の解釈 ([稲見2] p.36, PVBh p.25,4-13) に従った。

大種の転変はない云々²⁰⁴というのが〔勝義の立場からの〕唯識〔論〕である²⁰⁵。
〔諸経は施設のみを引き出しており、勝義には如何なるものもないのである²⁰⁶。〕

4.3.1 p.57,7-9 因果関係は世俗である、来世も考察されるべき必要性

「あるいはこれ〔則ち因果関係あるいは生じること²⁰⁷〕は世俗から」〔言われている、と言うならば〕、来世も同様〔言説としてある²⁰⁸の〕である、と。〔もし、因たる事物が言説としても容認されないならば、（汝の言う）諸大から心が（生じる）ということと、あるものに入ったり、反対にしたりすることは成立しない。因果関係が言説として容認される場合、心は心から生じるのである。要約して次のように言う²⁰⁹。〕

もし「〔来世を認めることと来世を証明しないことが²¹⁰〕不二であることによって満足があるならば、汝はあらゆるあり方で解脱している〔ことになる〕。〔しかし不二には量の否定があることから〕言説が働く」と言うならば、来世も考察されるべきである<398>。

〔ある人に〕迷妄²¹¹がある場合、〔来世を証明する特相をもった²¹²〕迷妄²¹³は最大のもの（ある意味で認められるべきもの²¹⁴）で〔あるが来世を否定する者によっ

²⁰³ (Ya) 61b8-62a1

²⁰⁴ TSP p.637,25-p.638,14 tatas ca tatra tasyāṃ santatāv avasthāviṣeṣe 'vasthāpito 'yaṃ paraloko 'pi na pāramārthikāḥ syāt ? naiṣa doṣaḥ. <santatisābdena kṣaṇā> eva vastubhūtāḥ <santānino> vyavahāra<lāghavāya> <sāmastyena> yugapat <prakāśyante>, <vanādi>śābdeneva ghavādayaḥ. ここは来世を勝義とはしないカマラシーラの、TS 本文に対する解釈の箇所である。

²⁰⁵ Cf. TSP 677,11f. mama tu yuktaṃ vijñānamātravādināḥ, ālayavijñānasvabhāvatvāt kāyasety abhiprāyaḥ. 「一方私唯識論者にとって合理である。身体はアーラヤ識を本性としているから、と意図している。」

²⁰⁶ (Ya) 62a1

²⁰⁷ (Ya) 62a2

²⁰⁸ (Ya) 62a2

²⁰⁹ (Ya) 62a2-4

²¹⁰ (Ya) 62a4

て来世を証明することが認められるべき²¹⁵で]ある²¹⁶。何故ならば[不二に依存した状態であり煩惱の諸業が静まる²¹⁷]寂滅(解脱²¹⁸)と²¹⁹、天界[が得られること²²⁰] (と不死²²¹)等は好ましいもの(anukūla)であるから。

4.3.2 p.57,9 迷妄が利益と最高の人間性を減する

実に愛欲等という迷妄²²²は、一切の²²³ [結果を生じる]利益と[最高の道に入った見等の徳を有する²²⁴] 最高の人間性等の有²²⁵を減するのである。

4.3.3 p.57,10-12 諸の相違は無始の修習による <唯識説>

²¹¹ upalpave を upaplave と読む。

²¹² (Ya) 62a5

²¹³ upalpavaḥ を upaplavaḥ と読む。

²¹⁴ (Ya) 626

²¹⁵ (Ya) 62a6

²¹⁶ [Franco] p.178, n.20 より evam を eva と読む。

²¹⁷ (Ya) 62a6-7

²¹⁸ (Ja) 228b3

²¹⁹ [Franco] p.178, n.21 を採用して praśamasya- を praśama- と読む。

²²⁰ (Ya) 62a7

²²¹ (Ja) 228a4

²²² -upalpavo を -upaplavo と読む。これは nor pa と訳される。また (Ja) 228b4-5 は来世に結び付けるものとしてそれ [=分別知]の対象たる所取・能取・有分・我[執]・我所[執]をあげる。

²²³ Tib. 欠。

²²⁴ (Ya) 62b2

²²⁵ Tib. 欠。

則ち〔施設された²²⁶〕眼等・愛欲等の一切の諸相違（特相性）は、無始の修習の習気の力に依存している唯識から区別されない〔。そしてこれは言説の量（*vyāvahārika-pramāṇa）であって、他方（勝義の量）ではない²²⁷〕。そのことから、眼等を持たない²²⁸者も、別の世で〔業の力によって異種の習気となっているから²²⁹、〕再度完全な眼等の性質がある〔、顕現する認識は生起するが対象はない²³⁰〕。〔感官とは等無間縁の特殊な力である。分別を本質として、知に感官として顕現するのである²³¹。我執によって施設された有にも顕現がある²³²。〕

4.3.4 p.57,12-14 〔帰結〕 習気は感官や外部対象とは関係なく無始であり、迷妄のある限り無終である

そのこと（唯識²³³）から、連続した生は自ら〔固有〕の種類であり、〔認識は自性によって成立している²³⁴から〕輪廻の無始性がある。また〔輪廻が無終であるという真理の修習が意味がないのではない。何故ならば次のような条件がある。〕迷妄を静めない〔不二の現量の者とならない²³⁵〕限り、その限りそれ〔輪廻〕の無終性もある²³⁶。眼等が〔習気の自性ではないが、認識の自性として²³⁷〕真実であっても、あるいは〔青等の集合である²³⁸〕外部対象〔が物質の自性と

²²⁶ (Ya) 63a1

²²⁷ (Ja) 228b5

²²⁸ vikalpasya を Tib. より vikalasya に読む。

²²⁹ (Ya) 63a7

²³⁰ MAV I-3abc arthasattvātma vijñāptipratibhāsam prajāyate / vijñānam nāsti cāyārthas --- // Yamāri 62b6-7。〔〔外〕境と有情と我と了別として顕現する識が生じる。しかしそれ（識）には対象がない。〕

²³¹ (Ya) 62b8-63a1

²³² (Ya) 63a2

²³³ (Ja) 228b8

²³⁴ (Ya) 63a5

²³⁵ (Ya) 63a7

て実在で] あっても²³⁹、こ [の習気] の自性は [二つの身体では分断されないから²⁴⁰] 無始であるから、輪廻の無始無終性がある [。また別解すれば、眼等の感官の自性は、真実であるか、あるいは物質の自性によって外部の対象があることも合理である。よって外部対象は錯乱を本質とする見解があるので、無我に依存することが究極なのである²⁴¹] 。

²³⁶ TSP p.672,22f. yat sarāgaṃ cittaṃ tat svopādeyacittāntarodayasamartham, sarāgatvāt pūrvāvasthācittavat. sarāgaṃ ca maraṇacittam iti svabhāvahetuḥ. 「(遍充関係) およそ食のある心は、食を持つものだから、自己のために与えられる別の心を生起することが可能である。以前の状態の心のように。(主題所属性) そして死に際の心は食を持つ。(帰結) [よって死に際の心は自己のために与えられる別の心を生起することが可能である。] 以上は自性証因 [による論証式である]。」

²³⁷ (Ya) 63b1

²³⁸ (Ya) 63b1-2

²³⁹ (Ja) 228b6-8 「眼等において、夢のように現前のみによっては非真実であるが、効果的作用が逸脱しないから真実である。修習の相違という相違を有しているから、知のみが外部であっても認められたもののみが生じている。修習所生であるからである。」と説明する。

²⁴⁰ (Ya) 63b2-3

²⁴¹ (Ya) 63b2-4

Summary

This is an annotated translation of PVBh p.53,27-p.57,14 into Japanese. As E. Franco already translated this part into English in his book, this is a mere supplement and needless. But I did it only because I made reference to two sub-commentaries written by Jayamna and Yamāri, that own many pieces of important information.

Cārvāka thus asserts ; human beings and so on get their lives by the special mutation (pariṇāma-viśeṣa) of the four elements (earth, etc.) : soul of a human arises from its body that consists of those elements, and is the effect caused by the bodies of their parents, and has features of its own : we have neither former lives nor latter lives.

Prajñākaragupta refutes ; our breath etc. has its own special feature which is not caused by the parents' souls or bodies, but by the repeated practice (bhāvanā) by itself : those who hold their lives exist depending just on their own repeated practices, which result in series of lives.

If it can be that livings arise without repeated practice, all cause and effect relations would vanish. If our lives arise not from the former lives but from four elements, all entities would be born with lives in them.

Next Cārvāka refutes cause and effect relations presented by Buddhists. Buddhists admit that we attain lives from the repeated practice of the same kind. Cārvāka, on the other hand, assert that cause and effect relation exist only when they are different. Prajñākaragupta responds him by showing the exception that smoke arise from smoke, and concludes that although the new born baby has not the same cause as the former life, his repeated practice is the same kind as that of his former life.

Proving of the existence of former lives, latter lives are to be argued. This argument is important because it is closely connected with 'the theory of future cause' (bhāvikāraṇavāda) that perfect causes inevitably bring about the effect, and is actually applied that theory. As the essence of the theory will be argued at the commentary on k.49, he presents the perfect cause in the case of transmigration,

and that is fate (karma) and passion (kleśa). In order to explain the movement to another body, he moreover presents an important example of 'a body in dream,' by which Jainas afterward call him 'an explainer of the theory (of the existence) of a body in dream.'

This part of PVBh contains more important argumentations ; those are what is the mind only theory concerning to a transmigration, that the distinction between trueness and falseness is a mere conventional activity, and how validity of consciousness (pramāṇa) is concerned with emptiness (śūnyatā).

A religionist would speak truly when he confronts transmigration rather when he explains liberation he believes in. Prajñākaragupta left us much information that could be called one phase of his thoughts when he confessed of transmigration, and that is no less because he was a 'true religionist.'